

# ≪マルセル・プルーストの文学創造について≫

— プルーストと批評 —

柳 谷 巖

## 序 言

Bernard de Fallois によつて最近相次いで発見されたプルーストの二つの遺稿が、『Jean Santeuil』『Contre Sainte-Beuve』と題されてGalimard 社より出版された。この二作品のお蔭で、我々はプルーストにおける文学創造の發展過程を一層明確に辿る事ができるようになった。時代順による彼の文学活動を素描すると：

一八九二—六六年：短篇と散文詩集『Les Plaisirs et les Jours』  
(一八九六年出版)

一八九五—一九年：未完長篇小説『Jean Santeuil』(一九二二)

一九〇〇—五年：John Ruskin の翻訳とその批評的研究『La Bible d'Ainsiens』(一九〇四)『Sur la lecture』(一九〇五)等

一九〇五年：母親の死による文学活動の一時中絶。

一九〇八年：フランス作家の文体模倣。

一九〇八—九年：サントブーヴ及び十九世紀作家の批評研究

『Contre Sainte-Beuve』(一九五四)

一九〇九—一二年：長篇小説『A la recherche du temps perdu』

(一九二二—一九二七)

所で、彼の二つの小説を比較する時、『失なわれた時』が、無意志的回想による特権的瞬間を経て芸術家としての天職を確信するに至る主人公の物語、という強力な統一性を持った作品であるのに反し、『ジャン・サントウユ』にはそれが認められない。この事は、同時に、作者の精神の歩みを物語っている。事実『vocation invisible』の発見への精神の歩みを辿るその小説は、まさにその発見を出発点としてしか書き始められなかったのである。(C. Mauriac : Marcel Proust par lui-même. P. 16.) 従つて、プルーストが創造への道を発見したその方法を解く鍵は、彼がラスキンとサントブーヴの研究に専心していた一九〇〇—一九年のいわば彼の批評的時期とでもいふべき十年間に求めねばならない。

更に、プルーストにおいて特徴的なことは、『Contre Sainte-Beuve』から直接『失なわれた時』が生れた点である。Jean Pommier が指摘しているように、『失なわれた時』を求めて『の如き』膨大にして深遠な作品が一文芸批評の研究より出発して發展してゐることは文学史においてあまり例をみない現象である。(Revue

d'Histoire littéraire de la France, oct-déc, 1954, P. 596) 批評家ブルーストが如何にして創造的芸術家になり得たか。彼のラスキン研究及び『Contre Sainte-Beuve』を中心に、ブルーストの批評の形成と性格を吟味・考察することによって、この問題を解くことはできまいか。これがこの小論文の意図である。我々は、またあまり体系的に取扱われていないブルーストの批評観を全体的に把握することによって、彼の文学創造及びその美学の一面を明らかにし得るように思える。

#### 省略記号

TP : 《A la recherche du temps perdu》 I. II. III (トナイン版)

JS : 《Jean Santeuil》 I. II. III

PM : 《Pastiches et Mélanges》

C : 《Chroniques》

#### I 読書について

『ジャン・サントウエ』の失敗以後、ブルーストは小説家としての自信を失っていた。当時、彼は《意志の薄弱》から『苦惱に結びついた様々の感情を絶えずよび起す文学の仕事』(Correspondance avec sa mère, XCIV) よりも浮薄な気晴しの方を喜ぶ怠惰の気持ちにひきずられて、新しい小説に着手する日を一日延ばしていった。しかし、息子の文学的才能を信じる母親の強いすすめもあって、再び文学の仕事始める。但し文学の仕事といっても色々ある。『小説の前でこんなに躊躇しているとすれば、どうして学問

的な仕事をしつらなうか』(A, Maurois : A la recherche du Marcel Proust P. 107) 事実ブルーストは一九〇〇年頃よりラスキンの翻訳・研究に取りかかった。我々は、J. Autret 氏の秀れた研究のお蔭で、幾多の面に亘って、Influence de Ruskin sur la vie, les idées et l'oeuvre de Marcel Proust を認める事ができる。ここでは、ブルーストがラスキンの『王者の宝库』に関する評論『Sur la lecture』の中で述べているブルースト自身の読書観を考察しよう。いかにも、B. Grémieux が指摘しているように、『ブルーストの作品の基礎には読書そのものについての深い思索がある。即ち書物がその読者の精神にいかにか働かせるかという疑問に対する答が『Xxe siècle, P. 15』

ブルーストは種々の考察の後、次のように読書を定義する…

《C'est une intervention qui, tout en venant d'un autre, se produit au fond de nous-mêmes, C'est bien l'impulsion d'un autre esprit, mais reçu au sein de la solitude.》  
(PM 253)

この定義で、第一に特徴的なことは、読書における孤独の重要な役割である。ブルーストは、孤独、即ち外界との一切の交通が中絶された状態においてのみ、精神の爽り豊かな力強い働きを享受し続け得る事を強調する。所で会話や書簡では、相手に対する配慮から、心が外部に向けられ、それが不可能になる。読書は孤独のうちに行なわれる故に、それが可能なのである。この点で、たとえ言葉の上であらうとラスキンが、読書を《談話》と同一視するのは、読書の本質を見誤っていると、ブルーストが殊更神経質に異議を唱えている点に注意すべきである。即ち、会話が主役を演じる社交界に絶

えず出入りし、又友情を誰よりも重んじ、その為にはいかなる犠牲——自己の精神生活までも——をも敢えて辞さなかつたブルーストが、ようやく、その生活の無為を悟り孤独の重要性を自覚するに至つた事を明らかにしているように思われる。

次に特徴的なことは、読書の《有盛な役割》である。但し、知識獲得の手段としてではない。先に、ブルーストが当時、《意志薄弱》から受身の態度で絶えず自己を忘れた皮相な生活を送つていたことを述べた。こうした丁度《深い敵にはまり込んで一人では抜け出すことができず、強い救いの手を差し出さなければついに参つてしまふ人》(PM. 25) のように、精神的沈滞から、精神の眞の生活が始まる自分自身の奥深い部分に自然に下りて行けない者にとつて、読書は《une main puissante et secourable》となるのである。

それは如何にしてか？ 日常生活において、我々は習慣が絶対支配する受動的、機械的な眼で現実を見ているのに反し、芸術家は自身自身の vision を持つていて、事物、人間その他諸々の感情を、他人とは異なる角度から直視し、又読者にも直視するように仕向ける。こうして彼は《我々の好奇心を殺いでしまふ醜悪で無意味な宇宙のペールを一部もちあげ》(PM. 250) 習慣が覆いかくしている美の世界を垣間見させることによつて、我々自身に、自分の目で物を見たいという《欲求》(PM. 248) を起させるのである。従つて、精神生活を何よりも望んでいたブルーストにとつて、読書と云ふ場合、芸術作品のみを意味していた事は云うまでもない。云わば芸術作品というものは、それなしには、自分のうちに見落しているものを読者にはつきり見させる l'instrument d'optique (TP. II. 911) の様なもので、読書する時読者はめいめい自分自身の読者である。

ブルーストはどこかで云つている『自分で感じるものを自覚するようになるための最良の方法は、師の感じたものを自分の中で再創造しようとする事である。この深い努力によつて、我々は師の思想と共に我々自身の思想を生み出すのである』事実ブルーストはラスキンの作品に接することによつて、理解力、感じる力が増大した。

第三に、しかしながらブルーストは、読書が我々の精神生活において主要な役割を占めることを否定している。もし読者が、書物の中に《丁度他人が頁の間にはさんでおいてくれた蜜をなめるように、心のやすらひだ受身の態度で味わおうとする》なら害があつても益にはならない。又時として作者を熱愛する余り、文学的偶像崇拜に至る危険がある。逆に érudition は無味乾燥な知識の重みによつて読者の個性を圧倒する危険がある。

以上が、ブルーストによる、読書の本質的な役割である。要するに作者にとつて結論にあたる書物が、読者にとっては刺戟 (incitations) にすぎない。なぜなら、結局我々は眞理を誰からも受取る事が出来ない。我々自身で創造しなければならぬのである。それ故ブルーストは次のように云ふ。

《La lecture est au seuil de la vie spirituelle; elle peut nous y introduire : elle ne la constitue pas.》(PM. 250) “peut” という語に注意しよう。読書は必ずしも我々を精神生活に導き入れるとはかぎらない。たゞ可能性をもっているだけである。それはひとえに読者の態度にかかつている。成程ブルーストは精神生活における読書の優越的役割を認めはしなかつたが、上に考察した様に、彼は読書について深い省察を行ない、読書を、我々の精神活動の原動力となり得る独自の心理的行為と見做した。それ

故、《道德的な義務が大へん特殊な、芸術家の責務という形をとっていた》 (Maurais op. cit. P. 123-4) プルーストにとって、彼が表面的な生活と意志薄弱に苦しみながらも、そこから抜け出ようと真剣に努力していただけに、《治療の方法》としての読書は一種重要な役割を彼の生活において演じていたと結論できよう。

### II 批評家プルースト

一九〇五年、プルーストは母親の死に対する悲歎とこれに続く病状悪化のため、ラスキンの研究から遠ざかるが、一方すでに、この作家に対する熱情もさめつつあった。その事は彼の書簡で明らかである。(Cf. A. R. Dreyfus, Lettre XXIV, A.A. Bihesco. XXV: A Mme T. J. Guerie, N.) しかし、病いの肉体的苦痛にもまして、彼を苦しめ、おびやかしたのは死の観念である。なぜなら、云わなければならぬと心の中に感じている事柄が、死と共に一切消滅してしまうからである。かくして彼は決心する『汝未だ光あるうちに業をなすべし』という聖ヨハネ伝のキリストの美しい戒めに従って、以前の怠惰の無気力を阻止したいと思う』(OS. 131) 所がプルーストはすでに、自己の靈感の衰退を恐れる年令に達していた。もし相変らず、精神生活へ自然に入って行けないとすれば、彼が読書論の中で強調した、強力な救いの手としての読書はどうなったか。事実、1908年暮よりプルーストは今一度読書を通して批評の仕事を始め。『才能の破産とも云うべき感受性の減退によつて、もつとも云いたかつた事柄がもはや云えないにしても、せめてそれに次ぐ事柄』が云つておきたかつたのである。こうしてプルーストは《Contre Sainte-Beuve》を書いた。

云うまでもなく、文芸批評は文芸作品についてなされた批評であ

る以上、読書を前提とする。従つて正しい批評の基礎には又正しい読書がなければならぬ。しかるにプルーストは、上に見たごとく、正しい読書観をもつていた。この章では彼が批評を如何に考えていたか、その方法と価値基準について、又その理論が、実際の批評作品に如何に適用されているかを考察したい。

### IIのI 批評の方法

《Contre Sainte-Beuve》の中で、プルーストはサントブーヴの方法について、一章をきき、この方法を多面に亘つて検討し、厳しく批判している。多くの批評家たちによつて賞讃されているその方法というのは、『人と作品を分離せず、もしその著作が只の幾何学綱要でないかぎり、作品を書いた人を判断するために、まず、その作品と最も縁のないように思われる質問に答える事は決して無視すべきではないと考え、作者に関するできるかぎりの資料一切を手元に集め、彼の書簡を照合し、彼と知り合ひだった人々に(彼等の話や著書を通して)色々問いたすことにある』(OS. 136) プルーストは、作品を人によつて判断しようとする、このサントブーヴの方法をきつぱりと否定する。その反対理由は？

先づラクロと彼の作品との関係を考えればよい。『ラクロに危険な関係』を書かしたものは、彼の有徳の心の温味(これはきわめて大きかつたのだが)ではない……』(TP. ■. 88) 人と作品を同一視することをやめないかぎり、『ぞつとする程の腐敗墮落の書』である《危険な関係》と《またとない実直な男、もつとも理想的な夫》であつたラクロとの間の矛盾を説明しきれまい。逆も又真である。例えば私生活では無情冷酷なジャンリス夫人と彼女の道德的な物語 (TP. ■. 380)

他方、サントブーヴの方法の誤りは、歴史を通して、その結果を考えれば明白である。即ち彼が同時代の大作家たちに下した評価は殆んどすべてまちがっている。例えば、スタンダールについての結論は、『結局、このベール、この律気者』(CS 138)という訳だし、ボードレールについては『実際に人前に出ると得をします(…)礼儀正しく、敬意の念に満ちた模範的な候補者、言葉の繊細な、身みなり形の全く申し分のない男子』と云い、《悪の華》のことに『詩人が文学の極地 (l'extrémité du kamchaka littéraire) に建てたこの建物を《フォリー・ボードレール》と呼ぼう』(CS 172)と云っている。所で、サントブーヴは、『未知の新しい作品に於て、批評家の炯眼が証明される。一目で見抜き、見越すこと、それが批評家の才能である。これを持つている者の何と少ないことか』(PM 267)と云っているが、彼自身その例外ではない訳だ。しかしそれも無理のない事である。何故なら『天才の作品が直ちに賞讃を博する事の困難なのは、それを書いた天才そのひとが異常であり、誰も彼に似ていないからである』(TP 1 531)従って『我々の通念がはいっている陳列館の中で《偉大な才能》という名をつけられている典型を、新しい作家の特殊な外貌のなかに認めるには、ずい分長い時間を要するのだ』(TP 1 99)

次に、サントブーヴの方法と同様、テヌのように作品を外的条件(例えば、人種・環境・時期の三要素)などで説明する方法も誤っているとブルーストは考える。即ち『重大な事件も外部から我々の精神力に影響するものではなく、いくら叙事詩的な時代に生きても凡庸な作家はやはり凡庸な作家のまゝである』(TP 1 918)天才の独自性とは、いわば、『彼と同世代の凡庸な才能しかもたぬ人々と共

通の自我の上につきでている花、梢のようなもの』(CS 324)である。或は又、作中人物の《鈍》を採そうとするのも馬鹿げている。『なぜなら、一つの作品はそれが直接の告白である時でも、少なくともその作者の生涯の幾つかの挿話にまたがっているのである』(TP 1 908)ブルースト自身、《失なわれた時》を執筆しつゝ、幾度こうした読者の愚かな思い上りに対して自己弁護しなければならなかったことだろう。

こうして、まさにサントブーヴの方法の誤りを確認することによって、ブルーストは、自己の芸術観、それに即って彼が創造しようとしている文学の正しさを確信するに至る。彼の芸術観によれば、我々の詩は靈感を受けた瞬間の記念でありその瞬間は、我々の存在が過去の瞬間のなかに残して来た自我の一種の記念なのである(PS 1 305)そして『書物は、我々が習慣や社交や悪徳の内に示している自我とは別の自我の所産である』(CS 137)この考えから、一連の天才芸術家達 (Bergotte, Elstir, Vinteuil, etc) が誕生する。彼等は、きまつてその作品の偉大さとは逆に凡庸な外觀をしている。ベルゴットを例に取ろう。話者の想像する、《白髪のをやさしい聖堂歌手》と現実のベルゴット《蝸牛の殻のような形をした赤い鼻、黒いあご鬚の、優しみのない、背の低い、腰の太い、近眼のまだ若い男》とが全然似てないように、現実での利己的な野心家の悪徳をもったベルゴットと、書物の中で自己に忠実な時、実に立派に湧き出る清水のように純粹に、貧しい者の美しさを表現するベルゴットは少しも似ていない。そしてよし彼の悪徳が真実であったとしても『それだからといって彼の文学が虚偽であり、彼の豊かな感受性がお芝居、ということにはならぬ』(TP 1 558) 結局、

ベルゴットとその作品の關係は、ブルーストとその作品の關係に等しいと云えよう。

さてブルースト自身の批評の方法はどうか。彼によれば、およそ批評家たるものの第一の任務は『読者が、これらの個々特徴に印象づけられるように、またかような特徴が作者の本質的特徴であると思わしめる様な同質的特徴にその目が触れるように、読者を扶援すること』(PM. 108)にある。この任務を果すためには先ず作品に向わねばならぬ(これはサントブーヴの方法では必ずしも最も重要なことではない)但し一作品だけではなく、同一作家のいくつもの作品を読まねばならぬ。何故なら『一人の人間と一度話をしただけでも特異な特徴が見分けられる。しかし種々様々の情況でその特徴が繰返されることによって、始めてそれがその人特有の本質的な特徴であると分るのだ』(PM. 107)それと同様異なる作品の比較 (rapprochement des oeuvres différentes) によつて芸術家の精神的相貌を構成する共通の特徴を引き出すことができるのである。但し、注意すべき事は、繰返しと云つても、全く同じ事柄の繰返しではなく、ニュアンスをもつて相照し合い、相補し合つて独自の世界を構成するに役立つ、微妙な変化をもつた共通特徴を見出すことにある。他方、比較 (rapprochement, comparaison) は、周知の如く、多くの批評家の得意の方法であるが、問題はあくまで同一作家にかぎるべきで、異なる作家達の間と比較はブルーストの方法と外観しか似ていない。というのは前者の方法では一作家の特性を引き出すことは出来ないから。この点についてブルーストは小説の中で『文芸批評家がドストエフスキーとゴーゴリの間にする比較などは、この隠れた美の外にあるのだから全然興味がない』とか『セヴィニエ夫人のド

ストエフスキーの一面とらうのはばかげている』(TP. ■. 379)と語者に云わせ、又ボードレールとユルネーユ(C. 229)ネルヴアルとラシーヌ(CS. 1012)の比較についても、その誤りを指摘している。

以上が批評家の任務のすべてではない。ブルーストによれば『批評家はもつと先まで進むべきである。特殊の現実réalitéに付きまといれた作家の、特異な精神生活がいかなるものであつたかを、批評家は再構成して見るべきである』では作家の精神生活の若干の共通的特徴を発見するだけでなく、その精神生活を全体に亘つて把握し、完全に再構成するにはどうすればよいか。ブルーストは、作家の表面的自我を外部から眺めるサントブーヴの方法の誤りを確認した結果、作家の精神生活、即ちその深遠な自我を全体的に把握すためにはただ一つの方法しかないことに気づいた。即ち『この自我を理解しようとするならば、我々の心の奥底にその自我を再創造しようと試みることによつて、我々の内部で始めてそれに到達することが出来るのである』(CS. 137) 成程ブルーストは作者に関する知識をすべて否定するのではないが(Cf. CS. 356) 『真理が、たまたまある朝、友人の図書館員が我々に伝えてくれる未発表書簡という形で時評欄のつて我々の許にやってくる』と考へたり、作者たちをよく知つていた人の口から真理を蒐集しようと思へたりするのは、あまりに安易すぎる』(CS. 137)。それ故作品の中央に自己を据え、対象との完全な共感に入らねばならぬ『何物も我々にこの心の努力を免除してはくれない。我々はこの真理を全部創り出さねばならないのである』(CS. 136)

## Ⅱの2 批評の価値基準

所で批評というものは結局のところ、是非を示すことによつて、

作品の価値について意見を述べることを余儀なくされる。なぜなら文学を価値の一つの領域と見ることこそ批評の特性なのであるから。ではブルーストにとって批評の価値基準はいかなるものか。

『失なわれた時』に登場する一人物 *Mme de Villeparisis* に注目しよう。彼女は物語の発展の上でのみならず、文学的見地から重要な役割を演じている。即ち彼女は文学について色々語るが、サントブーヴと全く同じ批評方法・評価の誤りを犯している。例えば、彼女は自分の一家と大作家達の特別の交際関係を自慢し、彼等に關する自分の判断のほうに、彼等に親しく会うことのできなかつた人々の判断よりずっと正しいと考える。その結果、例えばスタンダールを次の様に評価する『ペールは（それがあの人の本名でした）とてもひどい俗人ですが（…）少なくともつき会いのいい人でした』（TP. I. 710）それ故、ヴィルパリス夫人はサントブーヴの代弁者といえる。従つてブルーストが直接のべていない、サントブーヴの価値判断の基準をヴィルパリス夫人のそれで代用できるだろう。所で彼女の価値判断の基準は、何よりも、謙遜、自己抹殺、一言ですます簡素な技術、簡明さと判断の中庸をわきまえる能力。（TP. I. 710）要するにブルジョアが何よりも尊重する中庸の趣味に対する忠実さであった。そこで、バルザックやスタンダールより *Molés* とか *Fontanes* とか *Barsot* 等を高く買うことになる。彼女はサントブーヴと同様、ボードレールやバルザックといった作家を理解できない。それはまさに、これらの作家達が『*France modérée*』という既成の凡庸なブルジョア道徳を粉砕し、この尺度で測ることのできぬ非合理的世界を創造したからである。所で『節度について十全に語るには、節度をもっているだけでは

十分でなく、節度のない激情を前提とする作家的長所が必要である』（TP. I. 185）同様に例えばバルザックの手紙にはスワンの到底使うに忍びないような下品な言葉がばらまかれているが、あのよう上品で、あのようあらゆる厭うべきおこがましさに潔癖だったスワンは、恐らく『*従妹ベット*』や『*トウールの司祭*』を書くことはできなかつたろう。（TP. III. 720）

次にブルーストは所謂『*実利性*』が芸術作品判断のための基準になりえるとは考えない。芸術家が愛国者であるためには、必ずしも英雄を主題とする必要はない。（TP. III. 831）又『*芸術家は（…）彼の眼前にある真理以外の何物をも——たとえそれが祖国であろうと——決して考えないという条件のもとでしか、祖国の名譽には戻し得ない*』（TP. III. 888）この意味で『*芸術家を象牙の塔より出させる*』という文学理論は全く馬鹿げている。又強い理論的、社会的、宗教的影響をもつ作品をしか好まない青年層は『*そうした影響力こそ作品の評価基準だと考えることによつて、（…）プリユヌチエール流の誤謬を繰返している*』（TP. III. 833）実際『*芸術作品の客観句価値は大したことはない*』（TP. III. 907）『*理智が芸術作品の評価を始めようとすると、もはや不変なもの、確かなものは何もなくなる。すべてが望みのまゝに証明できる*』（TP. III. 893）最後に、例えばルナンのように芸術作品は時代の表現である、という考えに反対する。ルナンにとつて傑作とは一時代を最もよく表現している作品であるのに反して、ブルーストによれば、天才の傑作は、それが書かれた時代のみならず全ての時代を超越している。彼は芸術の進歩さえ認めない。（Cf. TP. III. 1003）『*芸術において*』は先導者も先駆者もない。一切は個個人の中にあり、各人が自分

のために芸術的文学的修練を初めからやり直す。(…)天才的作家といえども今日やはり、自分で何もかもやらねばならぬ。ホメロスから大して進歩していない訳だ』(CS. 138) 芸術の進歩を否定し傑作の絶対美を信じるという意味でブルーストはいわば古代派の陣営に属すると云えよう。兎角、ブルーストは、思想や文体の外面的流行を重視して作家達を分類したり、何ら新しい使命をもたらさぬ作家を、たゞ彼が彼に先立つ流派に対して示す軽蔑や断乎たる口調のために予言者として崇める批評を、否定する。(TP. ■ 893)

天才の問題に戻ろう。ブルーストは天才の描く傑作は一時代によって決して汲み尽されず引續きて幾世代にも亘つてその秘密を放射すると説く。『ラシーヌの悲劇、セヴィニエ夫人の手紙、ボワローのうちに現実が存在しているが、十七世紀には気づかれなかつた多数の美を味うことが我々には許されてゐる。』(Réponse à l'enquête de La Renaissance) 更に次のように云え極言する。

『立派な書物は一種不可思議な言葉で書かれている。その一語一語に、各人が各様の意味をつける。そしてそれは誤説であることが多い。ところが、立派な書物にあつては、人々の冒すすべての誤説が立派なのである。』(CS. 303) といつても勿論この誤説が、前時代の批評家が認めた真理のたゞ逆を行く逆説批評や、《粗忽者》の中の一行を全モリエールと取換えてもいいという気まぐれ批評を意味しないことは云うまでもない。(TP. ■ 469) 以上否定的面より考察したが、次にブルースト自身の作品評価の基準はどうか。実の所、彼にとつて唯一の基準というのは作家の自己への忠実度である。芸術家は恣意的であり得ない。『詩人とは自然の口述に従つて、自然の秘密のかなり重要な部分を筆記する代筆者なのであるか

ら、芸術家の第一の責務は、自然の伝える至高な託宣に何も自分勝手につけ加えないことである』(PM. 156) しかるに《自然の至高の託宣》を人は自己の精神の深みにおいてしか聞きえない。従つて芸術家であるという事は自己に誠実であるということなのだ。ブルーストにとつて真の芸術家とは、特殊な現実の再創造のためすべての義務、生命までをまなげすてて《外観をうちこわし、真の精神の深みに降りて行く人》(CS. 306) のことである。従つて自己に誠実であればある程、その作品は一層独創的になる。しかるに文学に關して、作品は言語なしにあり得ない。それ故、作家の誠実さ即ちその作品の独自性は、使用された言葉の中のみ現われる。

従つて作品が独自なものであるためには作家各人の言葉が独自なものでなければならぬ。ブルーストは書簡の中で述べている『作家一人一人が自分の言葉を作りあげねばなりません。丁度提琴家が自分の音を作りあげるように。凡庸な提琴家の音と、(同じ音程の)チボーの音の間に、きわめて小さなことながら何と大きなひらきがあることでしょう。』(Lettre à Mme Straus XIV ■) 『我々が或る事柄を話そうとする時、(精神の静かな深みに降りて行かないで)他人——しかもきわめて俗悪な他人からやつて来て我々の頭に浮ぶ出来合いの表現を使用する』(CS. 306) ということは、作家の凡庸さ、不誠実さを示す目印である。それ故作家一人一人が精神の深みにおいて《思想が完全に反映しているような言葉》を選ぶべきである。この意味で『特に、知的精神的労作が、どの程度まで高められたかを判断することが出来るのは言語の質によつてである。』(TP. ■ 882)

所で、作家がめいめい自分の言葉を作ると云つても、全く未知の



理解できない言葉を考え出すことを意味しない。ブルーストはすでに若い時から、言葉の問題に関心を示しているが、一八九六年『Contre l'obscurité』と題する評論を書き、その中で、言葉の晦渋と究めるべき思想や感覚の晦渋とを混同すべきではないと述べている。後者は『全くの別の究めるべき豊かなものでない』と述べている。動きを言葉や文体の晦渋で不可能にするのは軽々しすぎた。『もし晦渋な感覚が詩人にとって一層興味深いとすれば、それを明瞭なものにするという条件においてである事はあまりにも明かである。もし夜を駆けめぐるなら、暗闇の天使のごとく光をかかげようか？』(C. 142)

ブルーストの批評における価値基準を考察することにより、彼の芸術観及び言語観を知ることが出来た。そこから彼の文体観が出てくる。即ち、

「Le style, pour l'écrivain aussi bien que la couleur pour le peintre, est une question non de technique mais de vision. Il est la révélation, qui serait impossible par des moyens directs et conscients, de la différence qualitative qu'il y a dans la façon dont nous apparaît le monde, différence qui, si l'on n'y avait pas l'art, resterait le secret éternel de chacun.」(TP. III. 895)

我々はスタイルがブルーストの作品において演ずる重要な役割を理解することが出来る。

### III の3 ブルーストにおける批評作品

さて次に、上で見たブルーストの批評理論が実際の作品では如何に適用されているかを考察しよう。ただここでは紙面の都合上、彼

の文学創造に結びついた本質点を指摘するとともに、

先ず文芸批評に属する彼の主要作品を分類すると四つのグループに分ける事が出来る。

1. ラスキーン研究：『Bible d'Amiens』、『Sésame et les lys』、『L'Écriture』、『Sur la lecture』等。

2. サンクトペーヴ及び同時代作家の研究：『Contre Sainte-Beuve』、『A propos du Style de Flaubert』、『A propos de Baudelaire』等。

3. 書誌：『Tel qu'en songe, par H. de Régnier』、『Les Ebouissements par la Cresse de Noailles』等。

4. 現代作家の文体模倣：『L'Affaire Lemoine』、『Journal de Goncourt』、『dans le Temps retrouvé』等。

一見して明らかな事は、わずかの例を除き、批評家としてのブルーストが常に現代作家を対象としてゐる事であり、これは彼の深い古典の教養と著しい対照をなしている。しかしこの特徴は、批評家は何よりも新しい作家の未知の独自性を発見すべきであるというブルーストの考えのごく当然な結果である。

次に、ブルーストの特徴的方法であった『 rapprochement des oeuvres d'un même écrivain』は彼の作品に盛んに使用されている。例えば『Ammanの聖書』の中で、ある文章がラスキーンの別の作品の一節を想起させることに註をつけることによつて、いわば読者に『mémoire improvisée』を貸し与えて、作者の中にたえず繰返される本質的なものを識別できるようにする。(Cf. PM. 108) 所で読者によつて『mémoire improvisée』と呼ばれるものは、実は批評家の内部で作られ、彼に二作品の間の質的類似点を発見せしめる記憶である。事物の本質を記憶の中でとらえるとい

うプルースト文学の本質的性格がここにもあらわれている。兎角こうしてプルーストはスタンダールの作品中に<sup>△</sup>位置の高まりに結びついた精神の高揚<sup>△</sup>(CS. 414)やゲーテにおける<sup>△</sup>我々の目に見えぬ本質的な事柄を儀式によって象徴化しようとする欲求<sup>△</sup>(CS. 405)を指摘する。

《Contre Sainte-Beuve》に<sup>△</sup>ついで、友人 G. de Lannin宛の書簡にみられる如くその第一の目的は《*écrire quelque chose sur Sainte-Beuve*》(A un ami P. 158)であり、サントブーヴに関する評論がその出発点となり、あらゆる問題がこのまわりに結晶化している。プルーストはその中心点にあたる第八章で、サントブーヴの方法を批判しながらも、根底では、創造者としてのサントブーヴを追求し、そこから芸術創造にとつての二重の教えを学び取っている。

先ず否定面では、サントブーヴは<sup>△</sup>靈感や文学の創造における特殊性を理解せず<sup>△</sup>(CS. 140)文学を政治や社交生活などと同列に置いていた。そこで、例えば Albat 夫人は、或は Arbourville 夫人はこの評論をどう思うだろうと考えることによつて、彼は常に<sup>△</sup>内輪の人々に宛てて書かれた作品、云いかえれば数人の人々の好みに差少化し、殆んど文字に写した会話にすぎないような作品を書いた<sup>△</sup>。(CS. 141)所がプルースト自身、サントブーヴの<sup>△</sup>迎合的な雑談の作品を書いた経験がある(Cf. CS. 426, CS. 438等)プルーストはサントブーヴを取上げることによつて、自己反省の糧としたとも云える。更にサントブーヴは<sup>△</sup>月曜談叢の中へ、より永続性をもった書物となるべき材料を入れ込み永遠に失なってしまう<sup>△</sup>。即ちこの作品のために<sup>△</sup>一つの小説が結晶する場合その中核と

なる筈の思想や、詩の形を取つて展開されるような思想、彼がいつか美を感じた思想の貯え<sup>△</sup>(CS. 155)をすべて犠牲に捧げてしまった。逆にプルーストは、未来の大作にそなえて、そうした無駄な浪費を差控える。

他方フランスの面は、サントブーヴが最初夢みていたのは、読書や書きものもするが、特に書きものをしすぎないようにして、友との交際を楽しむという、いわば<sup>△</sup>文学の粹人の夢<sup>△</sup>(CS. 140)であった。しかし後にこの理想の生活を諦め、生活のために立憲新聞に月曜談叢を執筆しなければならなくなった。『この時期以来彼が望んでいたひまな生活に、激しい仕事がつつて代つた』その代りに、『この仕事は、もし彼が初期に高く買っていたあの怠惰な生活にとどまっていたら多分永遠に日の目を見なかつたであろう多くの思想を表現するように、彼を強いた』(CS. 145)プルーストは又しても強いられて仕事をする生活の価値を認める『それは結局より実り豊かな生活であり、こうした生活がなければ自分らの心の富を他人に引渡すことのないような無為になりがちの人間には必要なのである』(CS. 141)こうして、敷衍すべき書物を読んで行く内に、貴重な思想が、形を取り、サントブーヴの心の奥より立ちあらわれた。それ故、サントブーヴの中にも創造者が居る。たゞ月曜談叢の中では不完全の形でしかない。そこでプルーストはこう結論する『外観は月曜談叢で、現実はこのわずかの詩。批評家の詩。それがあらゆる彼の作品の永遠性をはかる秤の分銅なのである』(CS. 156)結局、プルーストのサントブーヴ批評は、いかに厳しいものであろうと、単なる欠陥批評ではない。プルーストは彼の文学創造を考察しつつ、その背後に自分自身の精神像を垣間見た。プルーストは

サントブーヴ批評の口実のもとに、実は自己批評をやっていたのである。今やブルーストはサントブーヴの如く批評家・時評家としての生活をつづけることが、創造者としての挫折に通ずることをはつきりと悟る。サントブーヴとの出会いによってブルーストは自分が居る危機の状態、文学の袋小路を意識した。出口はいすこ？ 彼は自らに問い、摸索する。

その突破口を切りひらくためブルーストは天才の諸作品に打ち込む。一方彼が幾度か経験した無意志的記憶を通してその中に保持されている印象を深く究めることよつてのみ創造者になりうることを確信する。彼にはこの印象が芸術の唯一の素材のように思われた。しかるに理智はその印象をとらえることができない。そこから理智に対する彼の不信が生れる『日毎に私は理智に価値を与えなくなつてゐる。』彼は《Contre Sainte-Beuve》の冒頭で書いている。逆に、彼は、ボードレル・バルザック・ネルヴアルの作品の内に自分の企てようとしている文学と同質のものを認めた。即ち非合理的な世界である。いかにも、これらの作家の作品への真剣な問いかけは、結局 B. de Fallois が云つてゐるやうに、自己に対する勇気づけと、未来の作品の姿 (préfiguration) を見出すためであった。そして、ブルーストは必ずしも、これらの作家の世界を全体的に把握し再構成はしなかつたけれども、批評を通じて貴重な自己発見に達することが出来たのである。最後に、ブルーストの批評作品に特異な位置を占める文体模倣について一言しよう。

この pastiches というのは、伊吹教授も述べておられるように、人間の模倣本能から生れた一批評形式である。(《近代仏蘭西文学の展望》P. 217) 周知の如く、ブルーストは《ものまね》や文体

模倣によつて社交界の人々を楽しませた。彼は生れながらその才能があつた。そして彼自身、自分の体内に、作家の特殊性を構成する要素を把握する能力をもつた何者かが居ることを認める。彼は云つてゐる『：私はある作家のものを読み始めると、早速ことばの奥に、作家一人一人によつてちがう歌のふしをききわけける。』(CS. 301) この《人並以上に繊細で正確な耳》のお蔭で pastiches が出来たのである。『なせなら、ある作家で、ふしがつかめたら、ことばはすぐにやつて来るから』(CS. 301) この文体模倣の才能は、無意識の内に、作家の本質をとらえ記憶する能力である。ここでも記憶は重要な働きをしている。

### III 創造的批評家より批評的創造者に

ブルーストにとつて、書物は、我々が習慣や社交や悪徳の内に表示している自我とは別の自我の所産である。『Ce moi-là, si nous voulons essayer de le comprendre, c'est au fond de nous-même en essayant de le recréer en nous, que nous pouvons y parvenir.』(CS. 197) これがまさにブルーストの批評観の根本の性格であつた。彼にとつてこれこそが唯一の真実の批評の方法であつた。成程、読書は彼が苦しんでいた意志薄弱を癒やす手段ではあつたが、我々が見た如く、他人の書物を読むことは畢竟、怠惰な我々を精神生活の入口に連れて行く可能性をもっているにすぎない。作家の結論であるものが読者にとつては刺激にすぎない。これはブルーストの直面した第二の障害であつた。精神生活の入口で、彼ははたと行きつづまり、摸索する。『あらゆる扉をノックしてみたがどれもどこにも通じていない。たつた一つ入ることのできる扉、百年かかつてもきかしてゐることができなかつたであらうその

ような解にふと、それと知らずにつきあたる。と、それはひとりてに開くのだ。』(TP. ■. 806) 無意識的記憶による印象を自己の内に経験した特権的瞬間に、ブルーストは、自己の芸術創造のために解き明かさなければならぬ唯一の事柄は、自分自身の印象であることを悟った。それならば、どうしていつまでも読書を続け、たとえどんなにすぐれたものであろうと——他人の書物に向っていなければならぬ事がある。どうして、自ら精神生活に入っていくことが可能になった今、自分自身の心の中に書かれた書物に直面していけないことがある。ブルーストの批評観を徹底的におしすずめて行けば、それはおのずから必然的に広大な創造の平野に通ずる筈だ。まちがった方向ではなかった。他人の書物から自己の内的書物へ！これが、文学創造の過程に於てブルーストの辿った道である。彼は云う『未知の表象でできた内的書物——それを読みとることにかけては、だれも、どんな規則をもつても、私を助けることは出来なかった。それを読んで自分のものにするとはどこまでも一種の創造的行為であつて、他のいかなる人も代理をつとめることができず、又協力することすら許されていないのであつた。』(TP. ■. 879) 更に

『Ce livre, le plus pénible de tous à déchiffrer, est aussi le seul que nous ait dicté la réalité, le seul dont  
《l'impression》 ait été faite en nous par la réalité même.》  
(TP. ■. 883) こうして、ブルーストは、いわば半変態の批評家 (critique demi-métamorphosé) から完全な創造者に変身した。この意味で、彼の《Contre Sainte-Beuve》はまさに、蛹から成虫への変態の過程を示す典型的なモデルである。

こんな訳で、以後、ブルーストの文学観において、批評家の位置が創造者の下に置かれることになるのは当然である。翻譯家、批評家、時評家、それらはもはや敗北、衰退せる靈感、枯渇せる想像力の印にすぎない。ブルーストが失なわれた時を求めて、何気なく『社交生活の無為無益と眞の社会活動との関係は、芸術の世界における批評と創造の関係に等しい』(TP. ■. 470) とか『あまりばかなことを云わぬ医師は、批評家が詩を書かなくなった詩人(…)であるように、半分治った病人である』(TP. ■. 206) という時、この比較節は、主文の無意味な飾りでも、又単に主文の抽象的な説明でもない。更に、この批評家という言葉で、サントブーヴを暗示しているのではない。自分自身のかつての姿を回想しながら万感こもる思いで、ブルーストはこの短いことばを書きつけたのである。我々は、経験に裏打ちされ、記憶によって失なわれた時に密接に結びつけられているブルーストの作品の一語一語をこのように解釈しなければならない。

B. de Fallois の云うように、結局、批評の活動にブルーストは彼の本質的活動を捧げなかつた。何よりもまず、彼は唯一無二の作品の作者である。《草をかぶせた魚のように、その時までことばの形をとらずに心の内で保っていた》(CS. 351—2) 宝を明るみに出す日が今ややって来た。こうしてブルーストは創造者の活動に入っていく。そして《抗い難い特殊な欲望によつて》一種の出産 (procréation) を促されたブルーストは彼の《失なわれた時》を書き終つた時、丁度すべての卵を産み終つた後静かに死を待つ昆虫のように、心残すことなく死ぬことができるのである。》(CS. 353)

以上のごとく我々は、批評家としてのブルーストを無視することによって彼の文学を十分理解できないことが分った。彼にとつて批評の時代は文学創造に到達するために通らねばならない一段階であった。それ故、モーロワが『サントブーヴ』と『模作』は間奏曲にすぎない』(A. Maurois, op. cit. P. 149) という時、その重要性とその眞の性格を少なからず歪めてゐる。ブルーストの批評は、彼の創造に不可欠なものであり、互いに有機的な関係をもっている。

一方、ブルーストの少年時代の作文を引用しつつ『実を云えば、マルセル・ブルーストはすでに才能ある批評家であつた』(ibid. P. 33)とモーロワが指摘しているが、彼は『ラスキン』や『サントブーヴ』時代にそうであつたのみならず、その後も、即ち『失なわれた時』に於ても、その批評精神は弱まっていな。むしろその逆である。成程『サントブーヴ』は、個性的な度合を強めて、そのまゝ小説へと発展して行つた。又、ブルーストは『自分の本の中で現実を自然に開花させようとする大作家達は、みな、理智や批評的判断が自分の天才よりも劣つてゐると考へて、それらを本の中に少しもみせようとしない』(C. 202)と云つてゐる。しかし、彼の批評は、『Contre Sainte-Beuve』の後まゝは消滅することなく、彼の批評判断が『失なわれた時』を求めて『の中に吸収されて、この作品をしっかりと支えている。一例をあげるにとどめるなら、我々はすでに、サントブーヴがヴィルパリス夫人に姿を変えてゐるのを見た。』

要するに、我々は、ブルーストの中に一人の批評家が生涯に亘つて存在したこと、又この批評家が、彼の文学創造に重要な役割を演じたこと、最後にブルーストは生來の小説家というよりむしろ批評

的小説家であつたことを結論できよう。従つて、我々がブルーストの中に批評家を求めたことは逆説的でも、無駄でもなかつた訳である。

## 結 語

マルセル・ブルーストは自己の文学創造者としての自信を喪失した危機の時代に、即ち、創造者としての天職が、語源的な意味で critique な状態におかれたまさにその時に、批評に直面することによって、創造者としての自己の天職と、眞実なる唯一の創造の方法を決定的に悟るに至つた。この意味で、ブルーストの批評は、批評それ自体の本質的ならわれであると云える。即ち彼の批評は危機そのものである。

彼の批評作品、就中、『Contre Sainte-Beuve』は、その発見後、フランスに於ても日毎にその重要性が大きくなりつつあるといふことであるが、文学史の中にやがて批評家としてのブルーストに可成重要な地位が与えられるであらう。『Physiologie de la critique』の中のティボーデの分類を借れば、ブルーストの批評を、恐らく、ジッド・ヴァレリーの批評と共に『巨匠の批評 (critique des Maitres)』に位置させることがあつた。

しかしこの事は、ブルーストの『失なわれた時』を求めて『の作者としての栄光に影をさすものでは決してない。ブルーストがすべてをなげ入れたこの作品にこそ我々は注目しなければならぬ。』

『Contre Sainte-Beuve』と『A la recherche du temps perdu』を区別するもの、それは文体の質である。彼は『Le style est la question de la vision』と云つてゐるが、彼の文体を通して、その独自性即ち彼の vision を究める事が今後に残された課題である。